

洋語と日本語

萩原 義雄

いんぼのまぐい

欧米諸国の言語に留まらずロシア語や中国語・韓国語といった東アジア諸国の諸言語が日本語と融合している現代の私たちの生活では、言語快適空間というか多種多様の洋語文字や言語が生活空間にあふれかえっている。これらの言語は、すべてそれぞれの国の人たちが自国より発信し続けた結果でもある。これはまさに「文化のつぼ」とでも呼べる世界がこの日本国に今現存していることになる。

こうした異なる言語は、どのように定着していったのだろうか、その過程を振り返りながら現代日本国の今後を展望してみよう。

ヨーロッパ諸国との関わりは、南蛮文化の時代に遡る。それ以前の日本に異国の人々が来訪した正式記録は、『日本後紀』巻八、延暦十八(七九九)年七月是月の条に、

是月。有一人乗小船。漂着参河国。以布覆背。有犢鼻。不着袴。左肩着紺布。形似袈裟。年可廿。身長五尺五分。耳長三寸餘。言語不通。不知何国人。大唐人等見之。僉曰。**崑崙人**。後頗習中国語。自謂**天竺人**。常彈一弦琴。歌声哀楚。閱其資物。有如草実者。謂之綿種。依其願令住川原寺。即壳隨身物。立屋西路辺。令窮人休息焉。後遷住近江国々分寺。

とあって、小舟に乗った崑崙(インド)人が、棉^{*}の種を持つて三河国に漂着したというのが最古の渡来記録である。この人物が常言したであろう異言語(外国語)は、今に何も遺されていない。逆に、日本人が海を漂流して外国の地、露国(ロシア)に漂着した記録も古代記録からは見出せにくい。まして、西洋の異邦人が此列島の地に古の昔、足跡を留めたこと自体希有なことであつたらう。だが、東北の地には不思議な伝説も数多く伝承されていることも今後の日本の方言である言語地理学研究の面から明らかにされていくこともあるかもしれない。今は、遠い世界を夢見るに留めておくことにする。

はじめての西洋語

日本人が、はじめて西洋の言語と接したのは、葡語(ポルトガル)であつた。東洋貿易を活発にしていたポルトガル船一隻が天文十二年(一五四三)にタイから中国の寧波(ニンポー)に向かう途中、頽風に遭遇し、大隅国の種子島(たねがしま)に漂着した。この時に乗船していたポルトガル人が「鉄炮」を使って、その計り知れない威力兵器と火薬を我が国に伝授したのである。実際には、日本でも鉄炮は中国を通じて輸入され南九州では使用されていたとも云う。

日本列島への航海路が知られると、春から夏、季節風を利用して、九州地方に日本人が珍重する生糸を積んだポルトガルの貿易船が豊富な銀を求めて入港するようになっていく。言語でのやりとりは、習得が意外に早かつたこともあって、ポルトガル語を話せる日本人も誕生する。薩摩(鹿児島)のサムライ、アンジロウという。彼が日本を離脱し、マレー半島の南岸マラッカに渡り、ここでイエズス会ス・ペイン宣教師であるフランシスコ・シャビエルと接触する。この二人の出会いが、日本へのキリスト布教へと進展していくのである。シャビエルは、アンジロウを起用

*棉「棉」と「綿」という字の違は、実を収穫して種を取り除いた段階までが「棉」。その後、機械や道具で打ってほぐしたものが「綿」と区別して表記する。

するに及びインドのゴアの学院で西洋の学問を修得させている。この間に彼は、洗礼を受け、天文十七年(一五四八)、自身の罪障を追った半生と日本伝道の決意した手紙を、イエズス会会長ロヨラに送っている。これが日本人によるポルトガル語で書きしたためた文書である。そして、翌年アンジロウとしてシャビエルが鹿児島に上陸し、布教活動の旅を平戸・京都・堺・山口・大分と続けていく。この布教で、大友宗麟(豊後)・有馬晴信(肥前)・大村純忠の大名がイタリア国ローマ(ROMA)に使節を送る。大名の血縁者である少年使節として、正使に伊東マンシヨ・千々岩ミゲル・副使に中浦ジュリアン・原マルチノの四名が日本語を解せるポルトガル人の神父メスキッタユリアンを仲介者として、イタリア人のイエズス会巡察使バリニヤニが率いて天正十(一五八二)年二月、長崎を出航している。ヨーロッパ各地を歴訪し、一五八五年二月旅の最終目的地ローマでローマ法王グレゴリオ十三世に謁見、約二ヶ月を此の地で過ごし、ベネチア、ミラノを通過し、スペイン国バルセロナに上陸、ポルトガル国リスボンからインドのゴアを経て帰国したのが天正十五(一五八七)年であった。※参考までに、イエズスの時歴史は動いた第173回、日本の運命を背負った少年たち〜天正遣欧使節・ローマ教皇謁見の時〜が放映されている。また、この少年使節四名がローマ教皇シクストゥ五世から帰国の際に託されたという有馬晴信への贈り物(記念品)「黄金の十字架」縦4,8cm、横3,2cm、二十二金は、一九五一年長崎県南有馬(南島原市)の原城本丸跡から発見され現在、大阪府中津の南蛮文化館に保存されている。有信の遺品として現存する山梨県甲府市大和町の栖霞寺蔵「伝虚空蔵菩薩像(景教聖像)」(「國華」第1330号 第112編 第1冊、定価:4600円(税込)2006年08月20日発売に掲載)が知られている。

イタリア人のイエズス会巡察使バリニヤニと秀吉

日本は戦乱の時代、織田信長は本能寺で家臣明智光秀に倒れ、その光秀を倒した豊臣秀吉が天下の実権を手中におさめた頃は天正十八年、バリニヤニは、少年使節と共に再び長崎の地にやってきた。そして、京都の聚楽第において国書を捧げ、欧州土産の品々、アラビア馬を献上する。秀吉と直接日本語で会話したのは、ポルト

ガル人のジヨアン・ロドリゲスである。この折り、西洋技術文明の最高なる印刷機とその技術が我が国に渡来していたのである。二十五年の間、九州本草学林で印刷が行われ、天草版(キリシタン版)と総称される印刷書籍二十九種が現存する。実に稀なる書本なのである。日本の文字で表記された『和漢朗詠集』『どちりなきりしたん』『落葉集』『字書』。羅馬字綴り仕立ての『エソポの物語』『イソップ物語』『平家物語』『金句集』やロドリゲスの『日本語大文典』など、さらには『日葡辞書』(二万三千語を所載する)も編纂刊行されている。

伊達家家臣支倉常長、太平洋海を渡る

時代は再び大きく動き出す。秀吉の対外交流政策は、スペインからの布教を認めなかった。ポルトガル国とスペイン国との日本市場という利権争いも影響していたであろう。秀吉の貫いた姿勢は、スペインの貿易船サン・フェリペ号の土佐浦戸に入港したとき、積み荷没収、さらには京・大坂の宣教師信者ら二十六人を長崎に送り処刑断行という布教弾圧政策となつて表出している。だが、ルソン壺などの品々には目をかけているのである。

この秀吉亡き後、徳川家康が実権を集中におさめ、家康はルソン・アンナン・メキシコ貿易を企て、スペイン宰相ドケ・デ・レルマ宛に候体の親書を送っている。こうしたなかで、東北(仙台)の霸王と称せられる伊達政宗もメキシコ貿易を求め、慶長十八年(一六一三)、スペイン王とローマ法王に使節を派遣する企てを実施している。スペイン人ルイス・ソテロを道先案内人として正使支倉六右衛門常長とし、黄金二千両と日本人一五〇名にスペイン人四〇人乗せて月ヶ浦を出航し、太平洋を進んでメキシコ・アカプルコに入港している。このとき、常長はキューバにあつて洗礼を受け、ドン・フェリペ・フランシスコと名乗りはじめている。であるから、此の時点から「六右衛門」のサインは見えないのである。スペイン国マドリッドでフェリペ二世に謁見し、さらに、常長がローマに到着したのは、元和元(一六一五)年の冬である。法王パウロ五世に謁見し、主君政宗公の書状を捧提している。その後、常長は

元和六(一六二〇)年に帰国しているが、郷里仙台での生活は幽閉の身とされ、異国のよすがを何も語られないままに終わっている。

三浦按針ことウイリアム・アダムス

言語もポルトガル語・ラテン語・スペイン語といった欧州言語に続き、いよいよ英語が新たに上陸する。オランダ船リーフデ号の航海士ウイリアム・アダムスは、イギリス人であり、「將軍」家康は大阪城にてアダムスと引見している。彼の航海技術として持参した海図を拡げ、オランダ国が独立戦争としてポルトガル・スペインと「いくさ」していること、カトリックとは異なる新教徒であることに耳を傾けている。この乗組員のうち、航海士ヤン・ヨステンは江戸邸をもらい、アダムスも家康の信任を得て帆船建造や幾何・地理を講じて二五〇石取りの武士として、日本名「三浦按針」と改め、外交顧問としても家康の諮問に答えている。この船長であるクワケルナックも家康から貿易許可の御朱印状を受け、オランダ東インド会社に届ける目的で慶長十(一六〇五年)、平戸からマレー半島パタニに向かい、ここで植民地攻撃のいくさに加わって戦死している。オランダ国が日本に到着するのは、慶長十四年の月日が必要であった。このとき、もたらされた贈答品の品々に、人のコトバを解する珍鳥オウム一羽がいる。さらに、イギリス国も東洋貿易に進出し、イギリス船クローブ号が慶長十八年平戸に入港している。この折、按針は船長を同道し、家康に謁見している。この折にジェームズ国王から献上された品物として「望遠鏡」がある。この按針も家康存命の間は、大いに活躍が許されたが、家康亡き後、二代將軍秀忠からは冷遇視され、元和六(一六二〇)年、滞日二十年の五六歳の生涯を平戸で終えている。

島原の乱とポルトガル船の追放

幕府は、やがて海禁令を打ち出すこととなる。洗礼名ジェロニモと称する天草四郎時貞を首領とする総勢三万七千のキリスト信者が原城に立て籠もる。このとき、幕府側は軍勢十二万を差し向け攻撃をしかけたが堅城に阻まれ、オランダ商館長に艦砲攻撃を命じているが、これも土囊、藁屋根の住居に損害をもたらせることなく、最後は兵糧攻めで平定している。この乱後、幕府はキリシタン弾圧を強め、寛永十六年に来航禁止をポルトガルに申し渡すことになっていく。ポルトガル国とは、九十余年に渡って交渉を続け、布教活動の宣教師の数は七十万人に及んでいたことになる。ポルトガル語理會はめざましいものがあつたと言つてよからう。これに変わつて元禄時代に、オランダ語が通詞言語となつていくのである。

イタリア人シドツチの日本上陸

新井白石『西洋紀聞』は、このイタリア人宣教師シドツチの語つた西洋の状況を聞き書きしたものであり、およそ七年がかりでまとめた資料である。この書は、明治十六年に大槻文彦が校訂するまで印刷刊行されることがなかつた文献資料なのである。現在では、身近な書物としては、岩波文庫に、さらに平凡社の東洋文庫¹¹³に収められ、箱入り単行本としては岩波思想大系に収められていてその全貌を知ることが容易になっている。また、外国語訳もこの大槻本に相まって刊行されている。是非、一読してほしい書物である。たとえば、

○またカステイラと申すは、イタリアなど聞えし地に近き國にて、むかし、其國にて作り出せし果子の、此土に傳へし物は、今も候なる。

○何事にやといへば、ヲ、ランドの語に、パスルと申すものゝ、イタリアの語にては、コンパスと申すものゝ事に候と申す。

○其北海の中、セントヘンセントといふ小島は、タンバゴを出す所也といふ。セントヘンセント、漢譯未詳。タンバゴは、漢に淡把姑、淡婆姑、淡芭菰等の譯あり、すなはちにこれ烟草也。

○その。パタゴラス、すなわち漢に巴大温と譯せし所也。また萬國坤輿圖に、此方孛露國、産スレ香、名ニ巴爾娑摩ト、樹上生ずる初、刀を以て割レ之ヲ油出ツ、塗ラレ尸ニ不レ敗レといふ。すなわちこれ西洋地方より出る所、パルサモといふもの、此ノ樹油也。ヲ、ランド人に、此物を産する地を問ふに、ペールイヒヤノムといふ。漢に孛露と譯せし所に於て、巴爾娑摩、すなわちパルサモ也。○まづ、其番語稱じて、デウスといふもの、漢に翻して天主とす。(中略)今西人の説をきくに、番語デウスといふは、此に能造之主といふがごとく、たゞ其天地萬物を創造れるものをさしいふ也。天地萬物自ら成る事なし。(中略) 其天戒を破りしもの、罪大にして自贖ふべからず、デウスこれをあはれむがために、自ら誓ひて、三千年の後に、エイズと生れ、それに代りて、其罪を贖へりといふ説のごとき、いかむぞ、嬰兒の語に似たる。といった抄出した内容が聞き書きとして詳細に収載されている。

明治維新と文明開化

ジエイムス・ヘボン編纂の辞書『和英語林集成』がある。初版が一八六七年に刊行され、再版、第三版と増補改編されていた。第三版は、講談社学術文庫に収載され、文庫本版で手軽に利用できる書物と成っている。初版本の最初の語は、英和の部「Abacus` Soroban.」 「Abat, Ushironi.」と始まる。初版「Bank, Kishi; tszka; adzchi; kashi; kane-kashi.」と表現するものを第二版「Gin-ko>ギンゴ銀行n. A bank. -shihet; bank note.」と変更している。

日本語における訳語新漢語の使用が整ってきたことを示す状況をつぶさに見るのができよう。この意味からも必携の辞典であったことは云うまでもない。また、日本人が制作した『哲学字彙』(一九〇一年)も注目されるべき、洋語を翻訳した新漢語の輩出に欠かせない語彙集であった。次に抄出するもの「Consciousness 意識」「Extension 延長 広表」「Member 肢体・会員(政)」「Partnership 会社」「Solution 解答」「Science 理学」「Object 物、志向、正鵠、客観」「Process 曆問、過程」「Sense 覚性、官能、意旨」「Didactics 教授法」「Limit 制限、界限、辺際、限度、端倪」「Nation 国、国民」「State 国家」「Discretion 謹慎、恭敬、裁量」「Trinity 三位一体、按、基督教徒中、有以天父神子聖靈、為三位一体者、天道溯原、固一而三、三而一者也」「Natural selection 自然淘汰」「practice 実用、力行、実践」「Free-will 自由意志」「Free-trade 自由貿易」「Subjective 主観的、心的」「Common sense 常識」「Microcosm 小世界」「Sentiment 情操」「Inventive faculty 創造力」「Existence 万有成立(按現象之外、別有广大无边不可得而知者、謂之万有成立之字、出于李密陳情表)存体、存在、生物」「Manner 態度。儀容」「Order 秩序」「Statistics 統計学」「Category 範疇」「proportion 比例」「Agnosticis 不可思議論、按、苟究、理、則天地万象、皆不可思議、此所以近世不可思議論之大興一也」とある。

また、此の書も『改訂増補哲学字彙』(一九〇四年)に編まれていて、「Criticism 批評、鑑識」「Interesting 有趣的、含味的」「Relation 関係、相对属性(論)、綱紀(倫)、戚疏(世)、関預」「Course 經由、通路」「Encyclopædia 合類節要」「Betrothal 婚約、結縁」「Power 権勢、器能、勢力、權威、自乘(数)」「Realization 実現」「Partner 社員」「Sociology 世態学 社会学」「Ingredient 成分」「Graduation 卒業」「Prime minister 大臣。宰相」「Representation 再現力、代表」「prosy 代理」の増補をわけていて現今の漢語受容を知る手がかりと成っている。

これは、最終的には、『英独仏和哲学字彙』(一九一二年)「Self-consciousness 自覚 自意識 自意識」「Pantheism 万有神教、凡神教(凡一作汎)と発展進化して行く。

洋語という外来語と日本文化

このように、時代の流れを追いながら、それら時代の流れのなかで外国人との交渉が浮き彫り成ってきている。明治以降の海外からの渡航者、逆に日本人自身が留学して彼地で学ぶことが盛んに行われている。文明開化の幕開けがここに始まるのである。

日本の社会が新たな文明を受け入れるのに、常に複合的価値を考え、総合的に異国の文明を受容する傾向が見られる。それも文明の熟成期に一気に受容をするという特徴が見えてくる。このとき、漢字文化で培われた漢語による造成語の役割りを見逃しては成るまい。

その一例として「馬鈴薯」とは、小学館『日本国語大辞典』第二版に拠れば、

ばれいしょ【馬鈴薯】〔名〕「ジャガイモ（芋）」に同じ。《季・秋》 ▼ばれいしょの花《季・夏》*物品識名（一八〇九）「ジャガタライモ 馬鈴薯」*救荒二物考（一八三六）「馬鈴薯 和名 ジャガタライも、甲州いも、ちぢいも」*新聞雑誌「明治五年（一八七二）四月「目今地味瘦たりと雖も麦と馬鈴薯（バレイショ ジャがたらいも）を生ぜざるなく」【語誌】一六世紀末にジャガタラ（ジャカルタの古名）から長崎にもたらされたが、全国に普及したのはアメリカから優良品種の持ち込まれた明治時代以降とされる。栽培の盛んな東日本では、方言の種類が多く、分布も複雑である。その名称は、収穫にまつわる名称としてドイモ・サンドイモ（収穫回数）、ゴジョイモ・ゴドイモ（収穫量の多いこと）、ナツイモ・アキイモ（収穫時期）、地名にまつわる名称としてジャガイモ・ジャガタライモ・オランダイモ・カライモ・ナンキンイモ・シコクイモ・キウシュウイモ、外国語に由来する名称としてカンプレイモ・アップライモ（馬鈴薯を意味するオランダ語 *artappel* から）、形状にまつわる名称としてアガエモ（表皮の色）、キンカイモ（表皮の滑らかなこと）などに分類される。【語源説】馱馬の鈴のように実がなるところからか

『外来語の話』新村出。【発音】バレイショ（なまり）アーレーロー・バレージョ・バレイショ（島根）バレーン（岩手）バレーンヨ（鳥取・豊後）バレンチョー（豊後）（標ア）□レ ○（京ア）○【辞書】言海【表記】馬鈴薯（言）とあつて、江戸時代に東アジアのジャカルタから渡来した「ジャガタライモ」で、これが日本の馱馬の鈴に形状が似ていたところから「馬鈴薯」と表記して云うようになったのである。

逆に、「石鹼」即ち、「シャボン」はどうであろう。同じく『日本国語大辞典』第二版を見るに、

せつけん【セキ】〔石鹼〕〔名〕高級脂肪酸の金属塩の総称。樹脂酸・ナフテン酸の塩類も含めていう。ナトリウム・カリウムなどのアルカリ金属塩のアルカリ石鹼とアルカリ金属以外の金属塩の金属石鹼に分類され、狭義では前者を指す。アルカリ石鹼は水溶性で表面活性が著しく、起泡力をもち洗浄力がすぐれる。硬軟により硬石鹼と軟石鹼に、また用途により化粧石鹼・洗濯石鹼・工業用石鹼・薬用石鹼・特殊石鹼などに分類される。ふつう、石鹼と呼ばれるものは、このうちの硬石鹼で、牛脂・羊脂・豚脂・硬化油・ヤシ油・綿実油などを適当に配合した油脂を、水酸化ナトリウム溶液で鹼化してつくる。*物類品隲（一七六三）一「石鹼 和名、シャボン、煉ものなり。和産なし」*蘭学逕（一八一〇）「定的識字 石鹼」*和英語林集成（初版）（一八六七）「Sekkenセッケン 石鹼」*西国立志編（一八七〇）七二「中村正直訳」五・三二「これと同一、石鹼（注）シャボンの水より湧起する泡沫の五色燦爛なるを見て」*吾輩は猫である（一九〇五）〇六「夏目漱石」二「もろ肌を脱いで石鹼で磨き上げた皮膚がびかついて」*本草綱目・石鹼・集解「時珍曰、石鹼出山東濟寧諸処」【語誌】織豊時代（一五七四〜九八）に南蛮貿易により渡来した。言葉としては举例の「本草綱目」が古いが、元来灰汁を麦粉で固めたものを意味した。江戸時代には、举例の「物類品隲」が示すように、スペイン語あるいはポルトガル語由来の「シャボン」が常用語として使用されていた。明治初期頃になると、漢語重視の風潮によって「石鹼」という表記が多用されるようになったが、シャボンと振り仮名が付されるのが普通であった。明治時代後半以降になって、漢字表記に基づく「セッケン」となってかわられた。【方言】植物、えごのき。《せつけん》福井県勝山市 036《せつけん

のき〔一木〕≒鹿児島県肝属郡965【発音】(なまり)セツキン(富山県)【辞書】(ポン)言海【表記】石鹼(へ言)

シャボン(名)(Yabonの古い発音からか)「石鹼」のこと。サボン。*多識編(一六三二)「石鹼 今案波伊乃加多末里 又云岐奴阿良比波伊、是蓋 今自南蛮来志也保牟(シャボン)之類耶」*浮世草子・風俗遊仙窟(一七四四)「三」しゃぼん虚粉の琢磨き、爪紅匂ふ身嗜」*安愚楽鍋(一八七一〜七二)「(仮名垣魯文)初「いろあさぐろけれどシャボンをあさゆふつかふと見えてあくぬけていろつやよく」*東京新繁昌記(一八七四〜七六)「服部誠一」四・西洋断髪舖「全頭変り了れば則ち洗膏(へ注)シャボンを塗て而して之を沐し」*「愛」のかたち(一九四八)「(武田泰淳)三」シャボンをつけ、再びゴシゴシ自分の指を洗った」シャボン玉。また、そのもとなる石鹼液。
*雑俳・住吉御田植(一七〇〇)「丸めたる・しゃぼん吹き出す筆の軸」*狂歌・才藏集(一七八七)八「風と出て風ときえやすき世の人は吹きししゃぼんのあはれはかなき」【語誌】従来シャボンの語源はポルトガル語とされてきたが、近年、スペイン語(Yabon)説が出され、有力となつてきている。またサボンという語形も存するが、これはポルトガル語が語源である。物として日本に伝えられたのは一六世紀末の南蛮貿易による。言葉としては、慶長元年(一五九六)八月九州博多の豪商神谷宗湛が石田三成にシャボンを贈つたことに対する礼状『筑前神谷文書』中に使われているものが古い。武将や商人などの贈答に使われていたらしく、一般の人々は洗剤としてではなく、主に子供の遊びの「シャボン玉」に使用していた。この語は江戸時代にはよく用いられたが、明治時代以降、文章語であつた「石鹼」が次第に口頭語として使われるようになったため、現代語では「シャボン玉」の形で残る程度である。【方言】植物。えごのき。《さぼん》≒加州³⁹石川県加賀⁰⁰³きぬがわみかん(絹皮蜜柑)。《さぼん》≒愛媛県一部⁰³⁰たにうつき(谷空木)。《しゃぼんぐさ》〔一草〕≒新潟県⁰³⁶(葉をもむと泡が出るところから)ゆうがぎく(柚香菊)。《しゃぼんぐさ》≒長野県北佐久郡⁴⁸⁵よめな(嫁菜)。《しゃぼんぐさ》≒長野県上田⁴⁷⁵《しゃぼんばな》〔一花〕≒長野県諏訪⁴⁸¹ひめじよおん(姫女苑)。《しゃぼんばな》≒群馬県山田郡²⁴⁰むくげ(木権)。《しゃぼんばな》山形県西田川郡¹³⁹(花から泡が出るところから)野生の撫子(なでしこ)。《しゃぼんばな》≒岐阜県飛騨⁵⁰²【発音】

(なまり)サボン(岩手・鳥取)シボン(鳥取)【辞書】(ポン)言海【表記】石鹼(へ言)

《「洋語」の実際》

『哲学字彙』井上哲次郎、他編がある。

《参考資料》

『日本外来語の研究』榎垣 実著(昭和38年、研究社刊)

『和英語林集成』第三版J・C(へボン)講談社学術文庫477

『日本国語大辞典』第二版(小学館刊)

◇近代小説に見る洋語「佐々木邦全集」奥山美穂さんの卒業研究資料